

平成 20 年度学部入学式における学長式辞（平成 20 年 4 月 8 日）

今日ここに入学式を迎えられた 1,739 名の新入生の皆さん、おめでとうございます。私は埼玉大学の教職員を代表して、皆さんの入学を心から歓迎します。また、今日の良き日の式典にご参列くださいましたご家族の方々に対しましても、心からお祝いを申し上げます。

春はスタートの季節です。よく「初心忘れるべからず」と言いますが、皆さんはどういう初心をもって、大学生活を始めようとしているのでしょうか。この中には、すでに卒業後の進路を決めていて、大学ではそのための勉学に励むと決意している人もいます。まことに結構です。そういう人は、どうか初心を忘れないで、勉学に励んでください。

しかし、大学は「知の府」と言われますように、高校を出たばかりの人には想像のつかないほど豊かな「知」に満ちた空間です。また、非常に多様で多才な人たちが集まってきている場です。ですから、皆さんが、これまでの学習や生活経験を通して自分なりに定めた進路は、大学での学問や人との出会いを通して、変化しても決して不思議ではないのです。どうか、そのことも忘れないで下さい。

もちろん、まだ進路を定めていない人が大半だと思います。そういう人の中には、どう大学生活を送るべきかのヒントを得るために、先学、先人が書いた大学論やエッセーを参考にするという人もいます。しかし、そうしたエッセーを読む場合に注意を要する点があります。それは、大学で勉強などしなくてもいい、自分はサークル活動や友人との付き合いといった体験によって成功した、という成功談が一つのパターンになっているということです。こういう成功談は変にリアリティーがありますが、これを遊んでいけばいい、と読んではいけません。学問以外の世界で成功した人は、不思議と言いたがらないのですが、彼らは学期試験となれば猛勉強するなど、隠れた努力もしているのです。また、大変な読書家であるのが普通です。

もちろん、大学を「知」の創造と伝承の場と位置づけるエッセーもあります。意外に思われるかもしれませんが、私は、ゴーリキーの自伝的小説、『私の大学』（1923 年）もそういう作品の列に加えたいと思います。ロシアの文豪マキシム・ゴーリキーは、貧しい生まれであり、初等教育も十分に受けていませんでした。彼は 10 歳にならないうちに両親をなくし、商店の徒弟や汽船の皿洗いなど、さまざまな職につきます。そして 16 歳のときカザン大学を受験しますが、失敗に終わります。そういう彼の、「カザン大学」となったのは、カザン社会であり、最底辺の人との交わりのなかから知識と思想を学んでいった経験だったのです。ゴーリキーの『私の大学』は、さまざまな読み方が可能ですが、私は、彼が「私の大学」と敢えて言ったところに、「知の府」たる「大学」に寄せたゴーリキーの憧憬を痛いほど感じるのです。

では、大学という「知の府」における勉学は、高校までとはどう違うのでしょうか。高校までの勉学は、答が一つある、その答に到達するための技術を習得すること、と言えば皆さんには分かり易いでしょう。そういう勉学の仕上げが大学入試だったわけです。しかし、大学における勉学は違います。大学で取り上げる問題は、考え方によって答がいくつも出てくる問題であり、逆に答がない問題もあります。それをとことん深く考え抜く、そのことによって世界が違って見えてくる、それが大学における勉学の醍醐味なのです。このことは、自然科学と社会・人文科学の別や、所属の学部、学科を問わず、変わりません。もちろん、こういう醍醐味を味わえるようになるためには、基礎的な勉強や、関連分野の勉強も必要です。埼玉大学は、深さ、広さ、相互関連性を教育の三原則とし、非常に個性的な教育プログラムを提供していますので、楽しみにしてください。

大学における勉学でもう一つ大事なことは、自分で学習するということです。大学はさまざまな教育プログラムを提供します。学生諸君は、それを活用し、自分で興味を持てる問題を見つけ出して、自分で深めるのです。大学で解明できない問題であれば、外に出て行って、深めればよいのです。埼玉大学はそういう学習の仕方も支援しますが、主体は皆さんなのです。

大学時代の4年間は、皆さんが自立した生活を営むための準備をする、そして、そのために失敗を含め自分を鍛える余裕を与えられたという、恵まれた時期にあたります。この時期を生かし、徹底して考え抜いてください。

本日は、特別講演に池澤夏樹さんをお招きしております。ご存知のように、池澤さんは、芥川賞はじめ主だった文学賞を総なめにされた小説家であり、詩人であり、そして文明評論家であり、読書の達人でいらっしゃいます。池澤さんは、こうした方ですが、私が入学式の特別講演をお願いしたのは、池澤さんが埼玉大学と縁のある方でもいらっしゃるからです。池澤さんは1965年に埼玉大学理工学部物理学科に入学なさっています。しかし、現在は別の分野で活躍されているのです。私は、こういう選択も埼玉大学における学習の一つの成果と考えたいと思っています。皆さん、どうか、池澤さんのお話をしっかり聞いてください。

最後に、皆さんがこれから四年間、研鑽を積み、逞しく成長することを祈念し、私の式辞といたします。

平成 20 年 4 月 8 日

埼玉大学長 上井喜彦